



梶井基次郎『城のある町にて』論(二〇一四年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大久保, 恵奈 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007488

梶井基次郎『城のある町にて』論

近代文学研究室 一四〇七 大久保恵奈

本作品の従来の研究には、梶井が、死への不安を感じながらも、生きることに期待していることについて触れられているものが、多く存在している。この〈生きること〉に関連して、梶井が「単純で、平明で、健康な世界」「営むべき生活」として、女性の洗濯風景に注目する。梶井は、この洗濯風景に「憧憬」を抱く。この「憧憬」であるが、入江の風景にも、梶井は「淡い憧憬と云った風の気持」を抱いている。

そこで、『城のある町にて』で描かれる風景、特に、入江の風景と、女性の洗濯風景の特徴を探ることで作品分析を行い、作品の主題を提示することを目的とした。

本作品では、女性の洗濯風景も含め、風景の中によく人間の姿が描かれているが、入江の風景では描かれていないことがわかった。しかし、入江の風景に、人間の生活の様子はみられるのである。「淡い憧憬と云った風の気持」とは、この〈生活〉に向いているものであると考えた。梶井は、〈生活〉に美しさ以上のものや、気韻の生動を感じつつも、まだ淡い気持ちであったり、悲しい唸り声を出してみたかったりと、〈生活〉へ加わることへの、不安やためらいも感じているのである。

それでも梶井は、姉一家と幸せな生活を送ることで、これからの〈生活〉へ、期待を抱くことができた。本作品は、梶井の一時の幸福を描いたものであるといえよう。